田子

ニンニク腐敗防ぐ 研究成果を解説

弘大

弘前大学と町名産のニンニク栽培などについて調査研究の連携協定を結んでいる田子町は1日、2023年度の事業成果報告会を町役場で開いた。収穫したニンニクの腐敗被害を防ぐための害虫対策など3件の研究成果について同大教授らが解説した。

農学生命科学部の高田晃准教授は、ニンニク収穫後に増殖し腐敗の原因となる線虫対策について研究。植物自体の耐菌性を向上させる薬剤や、土壌中の菌を減らす薬剤を投与するなど複数の試験区で収穫したニンニクの感染線虫の数を比較した。

高田准教授は、23年は22年に比べて5千匹を超える感染ニンニクは少なかったが、どの試験区でも軽微な感染が起きたというデータを示し「雪解けが早かったため、土壌菌の感染が活発になったことが考えられる」などと説明。異常に雪が少なかった24年も例年通りのスケジュールで栽培し、雪解けの時期と感染線虫の変化をあらためて検証したいとした。

このほか、同学部の前田智雄教授が「四川キュウリの特性に関する研究」、高野涼助教が「田子町の第一次産業の担い手と労働力確保に向けた受援力向上対策」をそれぞれテーマに発表した。（藤田幸雄）

発表する高田准教授

この画像は，当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。